

明代、安徽の江氏についての一史料

渡 昌弘

一

明清交替期、現在の安徽省南部で奴僕の大反乱が発生した。

順治二年（一四六五）六月、徽州府黟県万村の奴僕万黒九が、主人を殺して山中に寨を築いた。七月には同県の大僕宋乞がこれに乗じて黟県全ての奴僕を組織し、主人から身契をおどしとり、県内の拠点に寨を築き、多くの名望家・衣冠の族を殺害した。九月になると宋乞が一県民に殺害されて、この反乱は終息に向かい、十月には清軍が帰順工作を行ったものである。^①

概略は以上のように、この反乱については史料に地方志や文集を用いた詳細な研究がある。ところで、攻撃対象となった側ではこの反乱をどのように記録しているであろうか。

右に出てきた、宋乞を殺害した一県民とは江雷であり、殺害後に関連して江文龍なる人物もいたが、その一族がここで取り上げる黟県の江氏である。

この江氏については『済陽江氏統宗譜』^②に載せられ、「黟江村《五十五世》徳起公義烈伝」が江雷の伝である。ただし宋乞殺害までの過程が略記されるだけなので、ここでの提示は省略する。

また江文龍について、『済陽江氏統宗譜』では、彼が何世の人物か不明とする。しかし同治『黟県三志』巻六上・人物志・補忠節伝

には、

江文龍。蓬廈の人である。宋乞の乱があり、江雷らが宋乞の首を斬り、撞ち上げたところ、宋乞の残党は蓬廈の町を焼きつくし、江氏を滅ぼして宋乞の頭を得ようとした。しばらくして、文龍は（自分の）容貌が宋乞に似ているので、自刎して頭を彼らに与え、一族を生かそうとした。族衆はこれを引きとめた。約束を交わして一緒に逃げたが、俄かに一室に入り、文龍はやがて自刎した。そこで宋乞の妻に与え、やっと焚殺はおさまった。族人は文龍に義挙ありとして、木で（彼の）頭を刻み、これをひつぎに納めて喪に服した。^③

とあり、宋乞殺害後、残党による被害が自分たち一族に及ばないようにと考えて自刎し、頭が宋乞の妻に与えられた。これにより焚殺は収まったという。自分の身を犠牲した江文龍であるが、右の続きに「文龍、曾孫に至って絶えた。」と見え、それゆえに『済陽江氏統宗譜』では詳細が不明ということであろう。

二

このように『済陽江氏統宗譜』では、江雷や江文龍を知るには記述が十分でないが、黟県の江氏は宋乞ら奴僕の大攻撃対象であった。では、彼らを輩出した江氏はどのような一族であったのか。以下、これについて手掛かりとなる史料を紹介していくことにする。

黟県全域は十二の都に分けられていたが、江氏はそのうちの第二都地区に居住していた。同書・巻一・附前譜所載支派辨別・黟邑二

都村に、

地は黟県の北方にあり、県城を去ること十里である。卓公が臨淄高苑からこの地に遷つて以来、世々商・読を業としていた。逢村の里田・麻田、林村の墩頭・溪頭も、ともに同じ分派で、世代ごとに著名な人物を輩出し、黟邑の名望家であつた。⁽⁴⁾

とあり、卓なる人物が山東の臨淄からこの地に遷つてきたのに始まる。

黟県二都江村派の祖とされる江卓は、唐王朝に仕えていたが、王朝が滅亡したため、難を逃れてこの地に遷つてきたという(巻四「黟北江村始遷祖卓公伝」)。

卓の次に名が記されているのは、卓から数えて四七世にあたる元末明初の原善で、それまでの間の人物については見当らない。原善については「黟江村《四十七世》原善公伝」に、次のようにある。

公、字は沢之、号は山秀。一字は復初。元の末に生まれた。(當時は)戦争で乱れ、供億に忙しかった。

五年後、明の龍が興るに当たり、黟県は秣陵(南京)に近く、百官が郡(徽州府)に集まつた。正妻の黄氏が仲儀公を生み、妾の姚氏が仲修・仲遠・仲寛公を生んだ。黄氏が死に、王氏に後を継がせた。公は姚氏が自分の生んだ子を慈しむのを見て、儀公が孤立するのではないかと心配し、(儀公を)指しつつ、王氏に「後日、吾が宗族を盛んにする者はこの子である。汝が閔母となることを願う」と言った。また修公を指して、「吾が一門を光らす者はこの子である。汝が孟母となることを願う」と言った。王氏は典故を悉く繙いた。王氏は感じ悟るところが

あり、儀公はますます篤く愉しみ、素直で歓心を得、修公は機会あるごとに挙子の業を習った。⁽⁵⁾

原善は正妻が亡くなると、後をついだ王氏に、嫡男の仲儀を後継とし、庶子である仲修には勉学に励ませるように命じた。なお仲修の勉学の結果については記されていない。続けて、

洪武となつた後、公は年老い神減じ、家務を厭うようになり、悉く儀公に囑して「諸子の財はここにある。汝ひとりに任せるので、遣り繰り算段して弟たちを裕かにせよ。汝の責務は吾が心である」と言った。儀公は命を受けてひたすら勤しんだ。同居せる者は二十三人いて、入り婿したり遷つたり、あるいは徭役に迫られると、前後して公に居所を売り払うよう囑した。公は心を痛め、「古くから人が住み慣れた土地を離れたい(安土重遷)のは、宗廟のためである。田園を捨てて、どうして我に愛を生じさせ、一盂の麦飯を得られることがあるか」と言い、売却を許さなかった。すぐに穀物は底を突いた。足りなくなったので、あらためて肥沃な土地を与え、姚産張等で価に易えて償った。さらに修・遠・寛公や妹が結婚したり窮迫したりすると、家屋敷を与え簪や耳飾りを脱ぎ、急を凌がせた。そのち遣り繰りに余裕ができ、家はますます豊かになり、兄弟やその嫁同士には和氣がただよっていた。⁽⁶⁾

とある。右に「同居せる者は二十三人」とあるが、奴僕がいたとすれば、さらに多くの人々が同居していたことがうかがわれる。さらに続けて、

永楽戊子(六年)、公は病を患うと、亟かに儀公に囑して「兄

弟が争うのは、つねに小利・片産に起因する。わが家は汝のお蔭で充足したが、後日（財産は）四分して均しく取るべし」と言った。儀公は「男も本心はこのようである」と言い、（これを聞き）公はにつこり笑い、亡くなった。^⑦

とある。永樂六年（一四〇八）、病氣になった原善は、兄弟間の争いが僅かな財産の相違から起こるものと考え、嫡男の仲儀と庶出の仲修・仲遠・仲寛の計四人に財産を悉く等分させようとし、仲儀は快く承諾した。どの程度の財産を所有していたかは未詳だが、嫡庶にかかわらず、子には均分相続が行われたというのである。

三

さて、仲儀の四男が、四九世にあたる勝寿である。彼について、「黟江村《四十九世》勝寿公伝」に次のようにある。

勝寿公、幼名は□珠、仲儀公の四子である。三歳で父母を失った。……倉には穀物が積んであった。飢えた人が（穀物の）袋をつき、群れをなして騒いだので、紙筆を求め姓名を書かせ、穀物を貸して返済を待つことにした。公は慰めつつ、「素より顔を見知っていない。どうして姓名を用いたりしようか。私は返済を望まない。（倉の）鍵を開き、君たちが順次均しく取るのを許そう。（そうすれば、君たちは）踏んだり蹴ったりすることもなく、（われわれは）恐れることもなく、族閭は幸いである」と言った。たちまち空になった。（穀物が）得られなかった者には釜または升を給し、其の行いを誘った。秋、豊作だっ

たので、返済した者は半ばを過ぎた。なお借りた者の姓氏を書いたが、（借りた者は）公の返済要求を畏れて、官にこれが借用証だとした。（しかし）公は「彼らには以前から券は無い。私が今どうしてこれを焚やすと言うのか」と言った。ついで全公・宏公が生まれ、人々はみな天が農夫に報いた義（天報穀人之義）とたたえた。（下略）^⑧

これによると、年代はよく分らないが、飢民が発生した際に救済を行ったことが記されている。返済を強く求めることもしなかったようである。

四

勝寿の二代あとに五一世、寄祐と寄祥の兄弟がいた。寄祐について《孫》万和「黟江村《五十一世》寄祐公伝」に、次のようにある。

公、字は相之、福全公の次男である。幼いときから性は清廉であった。大父（祖父）が彼を溺愛し、宴を開くたびに膝の上に置いた。成長すると規矩にしたがい、早朝に起きて準備をし、直ちに自ら臧獲（奴僕）を率い、田の力役に服した。……辛丑（嘉靖二十年）^⑨ 泮に入り、杯を賜わった。

彼は奴僕を率いて耕作に従事し、また嘉靖二〇年には生員となった。寄祥については《従孫》万和「黟江村《五十一世》寄祥公伝」に、公、諱は寄祥、字は吉夫、号は東巖行四である。生まれつき穎悟であった。曾大父が命じて、学業を東山の江滔先生に受けさせた。庠に入ってから、祁門県の需嶺饒先生に教えを受け、経

書を談じ同類に触れ、日に千言を誦んだ。……

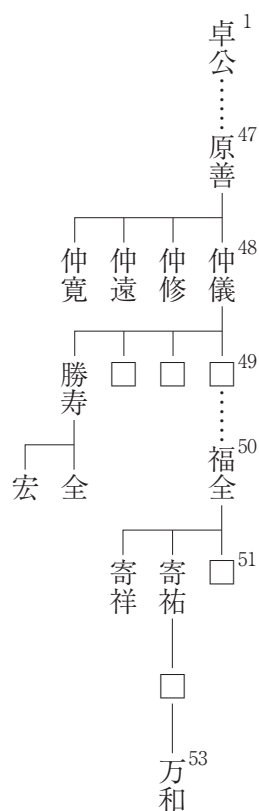
嘉靖壬午（元年）、廩膳生となり郷試に応じた。しかし不運にも母の死に遭い、ひどく嘆き悲しんだ。喪が明けて、ある人がそれとなく「太学に遊ぶのが科挙合格の近道だ」と言った。（そこで）乙酉（嘉靖四年）、米粟を運んで边防を助け、（それにより）南京国子監に入り、卒業した。たまたま吏部に選任を拒まれ、むしゃくしゃした気分で帰った。これによりふたたび科挙を受けずに隠居した。日々論・判を集め、暇なときには唐代の排律に倣い、わが祖と詩のやりとりをした。春は桃、秋は菊の園で酒を飲むと、禎公・禎公も席を連ね、まるで花が輝くようであった。

辛丑（嘉靖二十年）の任用試験で、吏部は真心を記した詩一首を求めた。公は良心と察識で拡充立論したため、成績の上位に置かれ、四川成都府都司断事、秩正七品を授けられた。¹⁹

とある。科挙合格を目指した勉学の様子がうかがわれ、生員、監生となったのち、嘉靖二〇年（一五四一）、成都府都司断事に任ぜられたという。

以上の伝から、本稿で取り上げた黟県の江氏は、高級官僚を輩出しなかったが、生員・監生を出す家であったことが分かる。

また、系図を書いてみると次のようになる。数字は何世かを示している。そして、五三世の万和の二代あとに雷がいた。



五

奴僕 of 反乱については詳細な研究があるが、史料としては主に地方志や文集が用いられている。その一方で、反乱の攻撃対象となった側では、どのように記録されているであろうか。反乱について検討を加える場合、こうした点にも目を向ける必要があるのではないかと考え、本稿では、安徽南部で起こった反乱から、宋乞を殺害した江雷、自ら犠牲になった江文龍の出た江氏に着目した。意に反して『済陽江氏統宗譜』に江雷と江文龍の記事は僅かであるが、彼ら以前の一族の様子的一端を知ることができた。それによると、財産の規模などはよく分からないが、飢民救済を行うことができ、奴僕がおり、また継続してはいないが生員・監生を輩出する一族であったことが確認できた。

【註】

（1）明末清初、安徽南部で起こった反乱については詳細な研究がある。概略は谷川道雄・森正夫編『中国民衆叛乱史』4（平凡

社、東洋文庫四一九、一九八三年。四一一～四一二頁）によつた。さらに同書（一八一頁）より詳しい経緯を示すと、次の通りである。

第二都地区（県城東北方）に江雷という者がおり、正義の士であつた。一県の害毒が宋乞に発していることを憤り、ひそかに宋乞が死なない限り禍いは止まないと考え、同じ志をもつものと誓いあい、ともども宋乞の動静をうかがつていた。

たまたま宋乞が第二都地区にやつてきた。護衛は大変多かつたが江雷は道のかたわらに身を伏せ、宋乞の（騎乗する）馬が通過するのを待ちうけ、刀を振りかざして馬上の宋乞を刺し、その首を斬つて隠し置いた。護衛の者たちは逃げ去つた。

各寨では、部隊を合同させ、宋乞の仇討ちを行い、また、第二都地区を焼きつくし殺しつくした。江雷は（もはや）逃げられないことを知り、林の中で首を吊つて死んだ。

（江雷が）予測したように、宋乞が死ぬと、奴僕たちの活動には、以前のような激しさがなくなつてきた。以上（の宋乞殺害事件）は九月に起つたことであつた。

（2）『済陽江氏統宗譜』は民国八年（一九一九）刊、江峯青・江巨鏊等修で、東洋文庫所蔵のものを利用した。巻首・新譜序・港口派統修宗譜序（民国四年、里人潘廷佐）に、

済陽江氏、環球著姓也。山東・河南・江右左以及湘楚閩粵之間、族姓蕃盛、將欲萃而聯之、貫而通之、會為統譜、匪

易易也。

とあり、全国に散在していた江氏の家訓を集大成したものだといふ。

（3）同治『黟縣三志』巻六上・人物志・補忠節伝、

江文罷。蓬廬人。宋乞之乱、江雷等斬乞首春颺之、乞党焚殺蓬廬、欲尽滅江氏、得乞頭。而後已文罷貌似宋乞、即欲自刎以頭与之、合活閹族。衆止之。約与俱逃、俄至其室、文罷已自刎矣。乃以与乞妻、焚殺方止。族人義文罷、刻木頭、殮之為服喪。

（4）『済陽江氏統宗譜』巻一・附前譜所載支派辨別・黟邑二都村、地在黟北、去県城十里。由卓公自臨淄高苑遷此、世以商説為業。如逢村里田・麻田、林村墩頭・溪頭、皆其同派、代有聞人、為黟邑望族。

（5）（6）（7）同書・巻四・失名「黟江村《四十七世》原善公伝」、

公字沢之、号山秀、一字復初。生於元季。干戈擾攘、供億繁劇。五旬後、偁明龍興、黟近秣陵、百役湊集於郡。邑室黃孺人生仲儀公、妾姚氏生仲修・仲遠・仲寛公。黄卒、繼室王氏。公見姚慈其所生、惟儀公孑立、指謂王曰、他日昌吾宗者此子。願汝為閔母。又指修公曰、光吾門者此子。願汝為孟母。王叩典故、悉啓之。王感悟、儀公益篤愉婉、得歡心、修公時習拳子業。洪武定鼎後、公年邁神減、厭家務、悉以属儀公曰、諸子之産在茲。汝其独任調度充拓、以裕弟。汝之責吾之心也。儀公受命惟謹。比族同居者二十三人、或贅或遷、或迫徭役、先後以居址属公索値。公惻然曰、古人安土重遷、為宗祧也。奈何廢棄田園、而使生我之愛、不得一孟麦飯乎。弗聽索益。亟罄囊篋、不敷更捐沃

產、於姚產張等、易価償之。兼修・遠・寬公及妹、姻媾・窘促、捐房產脫簪珥紓急。嗣後、調度從容、家益豐裕、昆弟・妯娌翁

公以良心察識、拡充立論、實上第、授四川成都府都司斷事、秩正七品。

如。永樂戊子、公病、亟囑儀公曰、昆弟忿競、每因小利片產。我家仗汝充拓、他日須四分均闡。儀公曰、男素心也。公莞而逝。

(8) 同書・卷四・失名「黟江村《四十九世》勝寿公伝」、

渡 昌弘 人間環境大学教授(中国社会文化論)

勝寿公、乳名□珠、仲儀公四子也。三歲失怙恃。……倉穀陳積。

飢人拄囊、群遶闕嘯、索紙筆書姓名、貸穀候償。公慰曰、素未識面、何用姓名。吾不望償也。啓鑰、聽君輩次第均取、毋躡蹴、毋悸、族閭幸矣。須臾一空。弗獲者、給釜或升、誘其行。秋豐甚、償者過半。仍書負者姓氏、畏公責償、于官伊為証。公曰、彼夙無券。我今何言焚之。嗣是生全公・宏公、人咸誦天報穀人之義。(下略)

(9) 同書・卷四・《孫》万和「黟江村《五十一世》寄祐公伝」、

公字相之、福全公次子也。幼性整潔。大父酷愛之、每燕賓置膝上。甫長循規矩、夙興叩省、即躬帥臧獲、服田力役。……辛丑入泮、乃賜卮。

(10) 同書・卷四・《從孫》万和「黟江村《五十一世》寄祥公伝」、

公諱寄祥、字吉夫、号東巖行四。資稟穎悟。曾大父命受業於東山江滔先生。入庠後、事祁之需嶺饒師、談經触類、日誦千言。……嘉靖壬午、食廩餼応秋闈、数奇旋丁内難、哀毀踰礼。服闋、或諷、遊太学、為応拏捷徑。乙酉、輸粟助迎、畢業南雍。会銓部拒臥引之請、鬱悒而帰。從此不復攻三場、秘竅矣。日集論判、暇効唐体排律、與吾祖賡歌。於春桃秋菊之圃会飲、則襟公・禎公聯席宛然、花萼之相輝也。辛丑試、銓部人須識其之真心一首。